

(ナレーションこれから) 無事といえるのか、なんとか以前のプロジェクトを終了させた彼らであったが、すぐにつきの開発案件がやって来た。リストラの名のもとにおこなわれた規模縮小により、ひとりひとりへの稼働がこれまでとは比べ物にならないくらい増えているのだ。(ここまで)

「さて、今回の開発内容だが・・・。」

三沢が説明をはじめ。

若干疲れの色は見えるが、みな、ひとつをやり遂げた達成感で表情は明るいようだ。

今回の内容はこれまでと違い、チームごとにサブプロジェクトを受け持つといった大型案件であった。その規模は数社におよび、全体で数十チームが散在する。

三沢の会社では、三沢のチームと鮫島のチーム、それに、最近プロジェクトが頓挫してもてあましていた、大河内主任の寄せ集めチームがこれに参画することになった。

「部長の物まねの顔」おう、三沢くん。調子はどうだね？(ここまで) なははーんてね。(笑)」

鮫島がつまらぬおやじギャグを飛ばしながら話し掛けてきた。ちなみに、鮫島は三沢より二年ほど先輩である。

「ああ、鮫島係長。まあ、ぼちぼちといったところですよ。そちらはどうですか？」と、無難に返す。

「ちみい、誰にものを言ってるの？大丈夫に決まってんじゃないの。はい、どいたどいた。」

「つと。」

わざわざ目の前の狭いところを三沢をどかせようとしながら通り抜けてゆく。

「(つたく)」

あいかわらず、なにかと意地の悪いことをしてくる。二年も下のやつにおなじ地位へ来られたのがそんなに腹立たしいのだろうか。

「(だいたい今回の件だってイケさんに無理押ししたって言うじゃないか。まあ、いつもどおり黒崎部長へ取り入ってイケさんを半分脅したんだろうけど。)」

「・・・ちよう、係長。」

浦成が呼んでいる。

「えっ？あ、す、すまん。えー・・・つぎに、この部分では・・・」

説明の途中で、ふと先ほどのやり取りが思い出されたのだ。

「(いかにいかに、集中しなければ！)」

気を引き締めなおし、システム要件の説明を続ける。そんなところへ大俵課長がやってきた。

「三沢くん、どうだい？例の件はうまくいったのかな？」

報告などとうの昔に受けているはずなのにわざとらしい。あいかわらずのタヌキっぷりだ。

「ええ、おかげさまで。」

ここは軽く流しておく。彼を相手にするには、自分の経験値だと不足しているのだ。

今回は、なぜか黒崎部長直々のプロジェクト組織となったため、ここでこのタヌキを静めて見せようと考えたのだ。体よく鮫島が直下についている。やつなら簡単に策へ乗るだろう。そういう魂胆だった。

「(会社に影響を与えるのは忍びないが、無理のないレベルでやらせてもらうぞ。)」

三沢には、大俵の配下につくものたちを使った戦略があったのだ。

コバンザメ鮫島をはじめ、きつい性格の小高や、今回は城之内が向こうへ配置されている。これだけ個性的であれば、かえってやりやすいというものだ。

「幸い、人の性格をつかむのは得意なほうだからな。」

実際、三沢はその人に対する様々な配慮が功を奏して係長に任命されたのだ。そういう面では大俵にも人を見る目があるといったのだが、実際は自分があれやこれやと言わなくても済むだろうというはらがあつたようだ。

※もし、思い浮かべるなら、ペロっと舌を出している顔にしてください

—自分の机にて—

「よし、戦術の読み直しをしておくか。」

三沢は、今回のシステム要件書を横にしながら戦略の再確認をはじめた。

「まずは自分の上につく黒崎部長をどうするかだが、今回は手柄を取らせることで取り入る方向にしよう。『美人計』の応用というやつだ。先輩は部長様々だから、係長を落とすにはこれだけで十分だろう。それに、失敗は人に押し付け、成功は独り占めするタイプだからな、部長は。えーと、これは『仮道伐かく』と『借刀殺人』になるのか・・・な？」

あまり自信はないのだが、書籍の例から導けばそれらが近かったのだろう。成功を収めた暁には、大俵の地位まで狙ってしまおうというものだ。

「つぎに、鮫島の配下をうまくコントロールしなければいけないのだが・・・。」

三沢が手帳を見る。

「城之内には悪いが、あの性格だと放っておいても小高と衝突することになるだろう。ただ、協力すればこれほど手ごわい相手はないともいえるか・・・。しかし、会社として成功しなければ意味がないし、ここは本当にむずかしいなあ・・・。」

（「うーん」と三沢は唸り、頭をかく）

「ぶつかり合えば『隔岸観火』で高みの見物だが、念のため『反間計』で散らせておくほうがいいな。鮫島先輩には「こちらは前回に使ったUP（統一プロセス）を適用します。」とでも言い含めておくか。こうしておけば、小高は実績が多くあるものにしか目を向けないし、まちがいなく城之内との知識バトルになるだろうからな。」

ここでは、二人が議論好きなのを利用しようというわけだ。ダテに書籍を読んではいないらしい。

「あとは自分のチーム……か。『暗渡陳倉』でXP（エクストリーム・プログラミング）をすすめておいて、『仮痴不癲』でだめっぷりを演じる。チームは『空城計』でもぬけのようにならせて……か。むずかしいな。」

今度はあごへ手をやり、唸る。

「ふむ、源を使えばいいか。あいつはささいなことでも言いふらすクセがあるから、“見た目よりもうまくいってない”ということを言いふらすよう仕向ければいいな。これは思ったよりも簡単か。」

兵法は「間者」を重用するのがよいというが、これを実践してみせようということらしい。三沢にも熱が入り始める。

「（むかしの戦略家たちも、こんな風に考えていたのかな……。）」
ふと、そんなことを思ってみたりする三沢であった。

（我に返り）

「つまるところ、『連環計』なわけだっ。」

（にやりとしながら「パンッ」と手帳を閉じる）

（ナレーションここから）三沢は十分に検討した戦略を実践する。ただ、『連環計』は、連環しなければ意味がないところにむずかしさがあるのだが……。 （ここまで）